歴　史　講　話

放送大学　福島学習センター
ミ　ニ　講　演　会

星　座　の　人

～山川健次郎の生き方に学ぶ～

令和4年　11月　13日（日）

會津稽古堂　第　7　研修室

主　催　学生団体会津学知会

放送大学福島学習センター　　ミニ講演会

令和4年11月13日　　研修室7
会津若松市地域教育コーディネーター　　成田　正良

～「星座の人」山川健次郎の生き方に学ぶ ～

1 はじめに

江戸時代の会津藩

・ 保科正之が会津藩主に

1611	江戸にて第2将軍秀忠の子として誕生
1617	高遠藩主保科正光に養われる
1643	正之、会津23万石をまかされる
1668	家訓15ヵ条を定める 家綱の補佐役として、22年3ヶ月会津を留守にする

・ 保科から松平へ
・ 3代藩主正容（御薬園）
・ 藩政改革（5代藩主容頌）、3大改革（財政・教育・産業）
・ 会津藩の樺太・江戸湾警備　により、財政悪化

1 会津／悲しみ・つらさ

（1） 健次郎ここに誕生

○ 嘉永6（1853）年、アメリカ大使ペリー浦賀に来航（開国を要求）
○ 嘉永7（1854）年閏7月17日、会津若松本二ノ丁に誕生
○ 父山川尚江　母艶の子として（幼名は重教）

・ 尚江　会津藩軍奉行をしていたが、健次郎7歳の時死去し、以来祖父・母により育てられる。
・ 艶　文化14年（1817）に生まれ、夫の死後剃髪して勝聖院と名乗る。歌道に長けていることから歌号の「唐衣」と呼ばれることが多かった。身分差別の厳しかった時代に奉公人を含めて子どもたちに,夜本を読み聞かせた。7人の子たちのその後の人生に大きな影響を与えた。落城後は、遠地で厳しい生活を生き抜き、波乱万丈の道を歩んだ。

○ 男2人（浩、健次郎）　女5人（双葉、美和、操、常盤、咲子）

・ 浩　戊辰戦争では家老職で籠城戦を指揮した。敗戦後、斗南藩の権大参事として統率する。後年は陸軍少将に栄進し、東京高等師範学校（現筑波大学）校長、貴族院議員を務め、男爵の爵位を授与する。
・ 双葉　東京女子師範学校（現お茶の水大学）の生徒監となり、叙勲の栄を授与する。
・ 美和　会津藩士の桜井と結婚、会津・斗南・函館・根室と夫ともに流転の生活をする。
・ 操　戊辰戦争後、旧会津藩士小出光照と結婚。佐賀の乱で夫戦死により山川家に復籍後年、ロシア留学、明治天皇妃に仕え、宮内省の権掌侍（ごんしょうじ）に任じられる。
・ 常盤　養子縁組で山川姓となる徳力徳治と結婚。徳治は法曹の道を志し、中央検事正になる。

○ 生家の山川家は家老職の大きな家
○ 生来ひ弱、「青瓢箪（ひょうたん）」というあだ名

（2） 日新館で学ぶ

○ 会津藩士の師弟は「什（じゅう）」といわれる組単位で行動

・「什」　会津藩士の子弟は藩校の日新館に入る前、組単位で行動した。午前中は近所の寺子

屋で学習、午後は登板の家に集合し、遊んだ。遊びの場というより、修業の場に近い。その場では、「什の掟」と称する規則があり、会津藩士の行動規範や精神的な支柱になっていた。

○ 文久2(1862)年、会津藩校日新館入学

・ 通常より一年早く9歳で全国屈指の藩校である日新館に入学した。初等科の素読所を好成績で終えて、難関の講釈所へ挑んでいる最中に迎えたのが…

(3) 容保公、京都守護職を引き受ける

○ 外国が開国を要求する
○ 開国し、条約を結ぶ(幕府大老、井伊直弼)
○ 安政の大獄(幕府批判者を逮捕・死刑に)
○ 1860年、桜田門外の変・・・幕府の力弱まる
○ 尊王攘夷(天皇を敬い、外国勢力を攻撃する運動)の高まり
○ 京都の治安が悪くなった(幕府の人を殺害)
○ 文久2年(1862年)、京都守護職を受ける　(家訓15ヵ条による)

・「家訓15ヵ条」　保科正之が案を作り、山崎闇斎が作成した。年3回(正月など)家老が藩士の前で読み上げられ、200年にわたって会津藩への重要な守るべきものとして代々伝えられていく。第1条「大君の義、一心大切に忠勤を存すべく列国の例を以て自ら処るべからず。若し二心を懐かば、則ち我が子孫に非ず。面々決して従うべからず」が決め手になり、守護職を受けざる得なくなる。

(4) めまぐるしい幕末の動き

○ 1863年、「壬生浪士組」の誕生　⇒　後に、新選組となる
○ 1864年、「池田屋事件」、蛤御門の変、長州征伐
○ 1866年、長州藩と薩摩藩が同盟を結ぶ
○ 1867年、15代将軍徳川慶喜は政権を朝廷に返上する(大政奉還)
○ 1868年、鳥羽伏見の戦い(旧幕府軍と新政府軍の戦い)

・ 新政府軍(5,000名、薩摩・長州・土佐藩)は今までの徳川幕府をなくし、新しい国づくりをしたい。
・ 旧幕府軍(15,000名、会津・桑名藩・見回り組・新選組)は「王政復古、将軍職の廃止、納地の召し取りは許せない。

(5) 戊辰戦争(1868年)

○ 4月、宇都宮の戦い
・ 宇都宮城をめぐり戦うが、旧幕府軍は敗北。
○ 5月、五稜郭の戦い
・ 榎本武揚率いる旧幕府軍が五稜郭で新政府軍に抵抗するが敗北、新選組土方歳三戦死する。
○ 白河の戦い
・ 激戦は5時間続いたが、最新式の武器の前に敗北する。
○ 5～7月、長岡城の戦い
・ 家老河井継之助率いる長岡藩とともに激戦するが敗北する。
○ 7月、二本松の戦い
・ ほとんどの兵は白河口などへ出撃、12～17歳までの少年隊も戦死する。
○ 会津の戦い(8月20日～9月22日)
○ 白虎隊士19名、飯盛山にて自刃
○ 白虎隊士として戦い

○ 兄浩の奇策

○ 籠城1か月

・ 若松城下に侵入した新政府軍は会津藩の反撃にあい、すぐに鶴ヶ城を落とすことは無理だと考え城を包囲して砲撃する作戦を取った。一方会津藩は鶴ヶ城に戻ってきた藩兵や旧幕府軍の人たちと一緒に鶴ヶ城に立てこもり、新政府軍と戦う方法を取った。こうして会津藩は1か月間戦うことになった。しかし、最新式の大砲などを持つ新政府軍は、1868年9月14日に総攻撃を開始し、1日に2500発もの弾丸を打ち込んだ。新政府軍との軍事力(アームストロング砲・ミニェー銃など)の差ははっきりとしており、苦戦をしいられた。この軍事力の前に城内の死傷者は増え、食料不足・弾薬不足などから、降伏を決意した。

(6) 降伏そしてその後

○ 1868年、9月22日会津藩降伏式

○ 会津藩士、新潟県・東京で謹慎

○ 1869年、11月新政府より会津藩の再興が許される(陸奥の国)

・ 1870年4月～会津藩士やその家族17，000人が「斗南」へ
23万石から3万石の下北の不毛の土地に移住させられた会津人たちは、まさに飢餓地獄ともいうべき苦しみを味わい、凍死や栄養失調などで死者が続出した。現在その入植地を見ても、とても作物が育つとは思えない北の荒地であり、思いを馳せると会津人の「慟哭」が聞こえてきそうである。

・ 学校を作り教育に力を(開墾政策や斗南日新館による教育)…円通寺

○ 会津の人々の想い

・ 城は落城し、会津藩は敗北した。藩士は斗南に「流刑」。死んでいった会津の人々の無念さは書き尽くすことはできない。賊軍の汚名を晴らしたい。
「会津をよみがえらせる、それには人を育てることが必要！そのためには教育が重要である」

2 新潟・アメリカ／学ぶ

(1) 奥平謙輔に学ぶ

○ 会津藩士 秋月悌次郎　　長州藩士 奥平謙輔 前原一誠

○ 真龍寺住職 河井善順の助け

○ 山川健次郎と小川伝八郎(亮)が書生

・ 明治元(1868)年旧暦1月13日、健次郎一行は敵の北越軍参謀として新潟に駐留する長州藩士の奥平謙輔のもとに向かった。旧交のあった会津藩士の秋月悌次郎が藩主の助命嘆願とともに「将来有為な少年たちの面倒をみてもらいたい」と依頼したからである。後に健次郎はこの決死行を振り返り「十二月、上人は余と亮とをして寺童に扮せしめ、之を従へて再び越後に赴く。時に窮陰互寒、積雪路を没し、加ふるに守兵の誰何に逢ひ辛苦百端名状すべからず」(「男爵山川先生遺稿」より)と書いている。

・ 健次郎は藩から託された名刀を束脩(そくしゅう)として差し出した。「命を預けた」という意味である。奥平の書生として勉学に励んだ。明治2年(1869)3月、新発田藩の豪農遠藤七郎の元に預けられ、その土蔵で万巻の書をむさぼり読み、「古事記」「日本書紀」などを筆写する毎日を送る。同年8月、上京し前原一誠の住まいに身を寄せた。やがて新しくできた斗南藩英学塾や沼間私塾などで学んだ。

・ しかし、健次郎の心は会津のことが気がかり(主君は、会津藩は、母・兄・姉妹たちは白虎隊の同胞は)、生き残った自分は会津藩士として立派な生き方をせねばならない。懸命であった。

・ そんな日々を送る健次郎に一条の光が差し込んできた。

(2) エール大学に留学

○ 明治政府の北海道開拓プロジェクト

・ 明治4年、政府機関の北海道開拓使が派遣するアメリカの一員に山川が選出される。留学の大半は薩摩・長州藩が占め、唯一健次郎が選ばれたことは画期的なことであった。彼にとってまたとない新しい活路を開くこととなる。

○ 明治4(1871)年元旦、横浜からアメリカへ

・ 健次郎を乗せた汽船「ジャパン号」の航海洋上で不思議な体験に遭遇することになる。その体験が、健次郎に理学に向かう決意を興させたと「男爵山川先生伝」に書いている。「今晩遅くか、あるいは明日の夜明けに本船は日本に向かって航海する太平洋郵便会社の船に出会ふであらう。日本へ手紙を出したい人は用意して置いてください」

・ 1月23日、無事サンフランシスコに着き、アメリカ東部に渡り、最初の1年間はノールウィッチという町で英語と大学進学に必要な科目を学び、翌年から3年間名門エール大学の前身であるシェフィールド理科学校において土木工学や基礎となる数学を学ぶ。

・ 途中、帰朝命令を受けるが、同級生の伯母ハンドマン夫人の力によって留学を続けることができた。ハンドマン夫人との約束「貴下が業を卒(お)えて帰国するならば、専心国の為に尽くすべきこと認められるべし」ハンドマン夫人との約束が健次郎の心に生涯生き続けていた。なお夫人の肖像画は、日本では初めて平成26年、北九州の企画展で紹介された。

○ 明治4年(1871)11月、旧友との再会

・ 行方の知れなかった、石田和助(飯盛山で自刃を遂げた白虎隊士)の兄五助が岩倉使節団の一員として渡米。五助は後に長崎県知事、福島県知事となる。出自を隠すため長州人となり、日下義雄と名乗っていた。

○ 明治4年(1871)11月、妹捨松がアメリカに

○ 明治5年(1872)イェール大学に合格

○ 明治8年(1875)5月、学位を得て、アメリカより帰国

3 東京・福岡／教育のために

※ その後の捨松

○ 万延元年(1860)、七女として誕生(咲子)

○ 明治4年(1871)、女子留学生として渡米(亮子・悌子・繁子・梅子・捨松)
(母艶、娘を捨てる、でも待つ)⇒捨松

○ 明治15年(1882)、津田梅子、永井悌子と帰国

○ 悲しい生活、初恋を経て、明治16年(1883)、陸軍卿大山巌と結婚

○ 「鹿鳴館の華」と呼ばれる

・ 捨松は英・仏・独語を駆使して、時には冗談を織り交ぜながら諸外国の外交官たちを接待した。12歳の時から身につけていた社交ダンスはステップは堂に入ったものだった。当時の日本人女性には珍しい長身と、センスの良いドレスの着こなしも光っていた。そんな捨松を、人はやがて「鹿鳴館の華」「鹿鳴館の貴婦人」とも呼ばれるようになった。捨松の役柄は、上流社会に生きるプリマドンナ役としてスポットライトを浴びることであった。

○ 明治33年(1900)、津田梅子女子英学校設立、顧問となる

○ 明治38年(1905)、日赤篤志看護婦人会理事として救援活動を行う

※ 兄(浩)のその後

○ 明治6年(1873)、陸軍省の軍人になる

○ 明治19年(1886)、陸軍少将に

・ 開城後、明治3年(1870)、斗南藩として再興となり1万7千人もの会津藩士が下北半島に移

住したときは、藩の大参事を勤めた。廃藩置県後は、陸軍に出仕し佐賀の乱、西南戦争で活躍し、陸軍少将となった。明治18年(1885)には森有礼の命により東京師範学校長(現筑波大学)、東京女子師範学校長(現お茶の水女子大学)を歴任し、明治23年(1890)、貴族院議員に就任している。

※ 柴五郎のその後

○ 福島県人初の陸軍大将(1860～1945)

・ 柴五郎は万延5年(1860)、会津藩士柴佐多蔵の5男として生まれ、戊辰戦争の際は母の強い勧めで沢に出かけ難を逃れる。他の家族は自決した。落城後は父・兄弟とともに斗南に移住、北の冷涼でやせた土地で、生死の境をさまよった。「ある明治人の記録」には、その時の苦難の姿が切々と綴られていて、涙なしでは読むことはできない。藩の選抜で青森県庁の給仕となったのを機に上京、旧藩士を頼りながら、陸軍幼年学校に15歳で入学してからは、士官学校を経て、軍人として頭角を現わしていく。北新事変で2か月間の籠城戦を指揮し、適切で勇敢な行動は、各国から高い称賛を受けている。日露戦争、第一次世界大戦への参戦など、日本の軍事大国化とともに、昇進を重ね、61歳で陸軍大将となる。晩年は、会津出身者の育英事業に尽力している。

※ そして、山川健次郎は

○ 明治9年(1876)、「東京開成学校」教授補

・ 後に東京大学、東京大学となる「東京開成学校」という最初の職を得た。

○ 明治10年(1877)、東京大学」理学部教授補に任じられる

○ 明治12年(1879)、我が国最初の物理学教授に就任

・ 以来、東京帝国大学教授在職25年へと続く「ゴールデンロード」を歩む。

○ 明治14年(1881)、唐津藩士丹羽新の次女鉚子と結婚

○ 明治26年(1893)、理科大学学長(現在の理学部長)に就任

・ 物理学発展の礎を築いていく。

○ 明治34年(1901)、東京帝国大学6代目総長

・ 山川の学識と高潔な人格が知れ渡り、浜尾新、菊池大麓の推薦もあり、48歳の時就任する。

・ 在任中は、私立哲学館の「答案事件」や工科大学の火災、日露戦争時の「7博士上奏問題」、これに続く文部省による戸水寛人教授休職処分と歴史に残る事件に直面し、波乱と緊張、苦渋に満ちた4年間であった。抗議の意を示し、総長を辞任する。

○ 明治42年(1909)、明治専門学校(現在の国立九州工業大学)総裁に就任

・ 九州の炭鉱王、安川敬一郎の意を受けて、自分なりの理想の学府を目指した(知識に頼らない全人教育)。「技術に堪能なる士君子たれ」という教育理念は有名である。その実現のために会津藩校に日新館の教えを継承すべく「徳目8箇条」を定めた。「明専」における崇高なる人材育成は、明治・大正・昭和・平成・令和と長きにわたり受け継がれている。

○ 明治44年(1911)、九州帝国大学総長

・ 健次郎の名声はなお高く、初代総長に任じられる。九州帝大は変則的な形でスタートしたが、健次郎は医科のさらなる発展と工科の整備・充実を目指した。そこに、突然「門司駅員自殺事件」が勃発したが、毅然とした態度を堅持している。しばらくして二度目の東大総長の話が持ち上がるが、健次郎は九州大学の完成まで在任のつもりでいたが、周囲の状況を鑑み転任を内諾する。辞任を巡っては学生の間に留任運動が起こっている。学生の健次郎に対する熱い思いが伝わってくる。

○ 大正 2年(1913)、第二次東京帝国大学総長

・ 二度目の総長は、大正9年(1921)まで足かけ8年に及んだ。

○ 大正3年(1914)、京都帝国大学総長兼任

○ 大正6年(1917)、国家プロジェクトの理化学研究所を立ち上げる

・ 安田財閥・安田善次郎の篤志を基にシンボルとなる「安田記念講堂」の計画に着手した。

○ 大正9年(1915)勲一等瑞宝章受賞

○ 大正15年(1922)、旧制武蔵高等学校(現在の根津育英会武蔵学園)校長就任

・ 東部鉄道創設者根津嘉一郎が創立した学校の建学に深く変わる。我が国最初の7年制高等学校という名門である。73歳という高齢であったが、根津の熱意に動かされたと言われている。

○ 昭和 3年(1928)勲一等旭日大綬章受賞

4 東京／心は会津に

(1) 松平家再興

○ 明治31年(1898)会津松平家の家政顧問

・ 家老職の家に生まれた健次郎は戊辰戦争後も主君の会津松平家と共にあった。家政全般の相談に与(あずか)る「家政顧問」に就任する。死去した兄浩の遺志を次いで隆盛を支え続けた。

○ 「京都守護職始末」「会津戊辰戦史」編さん

・ 会津藩の立場から戊辰戦争の正しい記録を後世に残すため、2書の編纂に尽力した。2書は会津藩にとって汚名をそそぐ雪冤の書である。作家の星亮一氏(郡山市)は「幕末会津史の根本資料であり、これを抜きにして会津の研究は成り立たない名著である」と書いている。

○ 大正14年(1919)～昭和2年(1925)、白虎隊墳墓の一大拡張事業

・ 戊辰戦争から5、60年を経て自刃した白虎隊の仲間たちは、うっそうとした松林の片隅にひっそりと祀られていたにいるにすぎなかった。忍び難く、多くの人々に参拝される霊場にしたい…その思いが鉄道王の根津嘉一郎の心を動かし、拡張事業が始まり、参道の整備が、現在の姿に実現した。当時有名なジャーナリスト杉村楚人冠(そじんかん)から「何たる旧景破壊」というクレームが入り、大論争を繰り広げる。

(2) 会津の教育・人づくり

○ 明治23年(1890)4月、会津中学校開校

・ 当時は「中学校は一県に一校」という方針のもと、福島尋常中学校(安積高の前身)のみだった。郷土を立て直すため設立運動が盛り上がる。手助けしたのが山川兄弟であり、高嶺秀夫(後の東京師範学校長)である。最初私立会津中学校として開校した。健次郎自身、藩校日新館の歴史をくむ同校への思いが強く、明治31年、大正6・10年と3度にわたり講演に足を運んでいる。

○ 明治33年(1900)、会津図書館開設

・ 明治の新時代に向かって「会津復興は剣からペンへ」と、図書館の発想が会津漆園会から出る。会津図書館設立に健次郎は全面協力、明治36年(1903)7月10日文部省より若松市立会津図書館として認可され、市立図書館の国内第1号となる。

○ 明治41年(1908)3月、会津出身学生の寄宿舎「至善寮」を開設

・ 明治20年頃は会津の若者たちが星雲の志を背負て上京する者が多かった。在京の関係者から寄宿舎をとの案が持ち上がる。山川の奔走により、大正6年(1917)12月2日待望の寄宿舎が設立された。山川は会津の日新館に因み「至善寮」と名付けた。(本当は止善寮)

5 東京／巨星の生涯

○ 昭和6年(1931)6月26日、逝去

・ 78歳の生涯であった。病床に「天皇、皇后両陛下より病気見舞いとして葡萄酒1ダースを御下賜あらせられた」と伝記に記せられている。母の艶や兄浩が眠る東京青山霊園に葬られた。

・ 葬儀は小石川伝通院で簡素に行われた。健次郎は生前、平素から「自分の遺体を医学上研究資料に提供したい。少しでも医学界に貢献したい。必ず帝大で解剖してもらうように」と家人に話していた。これを遺言として娘（照子）婿東龍太郎が帝大に解剖を願い出、解剖が実施された。
・ 青山霊園に母の艶や兄浩らの墓とともに眠っている。
・ 娘照子は晩年、「父はわれわれにとって神のような存在だった」と回想している。それは健次郎の本質の的を得た言葉であろう。

◎ 山川健次郎トリビア

○ わが国、初のライスカレーを食べた人

・ 健次郎は船旅の際、船の振動と船酔いで睡眠不足に陥ってしまった。もう一つの悩みが食事であった。慣れない洋食で肉料理の味や匂いに閉口し、食欲不振になった。健次郎の様子を見かねてアメリカの船医が「日本人ならば「コメのめし」がよかろうとライスカレーを用意した。しかし折角のカレーも口に合わず、コメだけを食べた。健次郎は後年、この一件を手記に残したため、「日本人として初めて食べた人」として広く世に知られることとなった。

○ わが国、初のX線実験の成功者

・ 明治28年（1895）、ドイツのレントゲンがＸ線を発見する。健次郎は早速その資料を留学中の長岡半太郎を通して入手し、不完全な装置ながら助教授鶴田賢次と共同で実験にとりかかった。同様の実験が第一高等学校（旧制）や京都大学でも行われた。苦労を重ねた実験の結果、健次郎側の成功が他のグループよりも一歩早かった。この成功のニュースによって、健次郎が我が国における初のX線実験の成功者と称されることとなった。

○ 千里眼問題

明治43年、御船千鶴子　明治44年、長尾郁子

おわりに

○ 会津武士道と山川健次郎（母艶の躾、「日新館の心得」と「什のおきて」）

・ 健次郎は、母の多くの言葉を思い出すたびに、「我が国の教育は情味が足らぬ。そのことによっていろいろな悪結果を生む。教育は学校が二分で家庭が八分なのだ」と説いている。

○ 山川健次郎の後世に残る名訓辞
「教養が広くなければ完全な士と云う可からず」

・ 人間としての成長には幅広い豊かな教養がいかに大事かを説く。
・ 学問より入るが、知識や理論ばかりの人になることなく、それを実践できる人間 形成が大切である。

○ 現在の未曽有の困難（繁栄・貧困、人災、天災、コロナ感染等）に対して

・ 山川健次郎が存命ならば、この困難にどう立ち向かったであろうか。恐らく、科学者ゆえに先輩・教え子など幅広い人脈を生かし、肝に銘じてことに当たることをまず訴え、現状を分析、身を賭して収拾にあたるのではないか。

主な参考文献

▼山川健次郎顕彰会「評伝山川健次郎・士君子の肖像」
▼星亮一「山川健次郎伝」▼久野明子「鳴館の貴婦人」▼山川健次郎顕彰会「山川健次郎・会津が生んだ知性の巨人」▼九州大学「修養がなければ完全な士と云ふ可からず」▼淮渓「山川健次郎顕彰会会報」▼久野明子「鹿鳴館の貴婦人　大山捨松」

大山捨松・山川健次郎略年表

年	日本のできごと	大山捨松のできごと	山川健次郎のできごと
1845			
1853	ペリー来航		
1854	日米和親条約		若松城下本二之丁に誕生
1860		捨松誕生	
1862	松平容保京都守護職任命		会津藩校日新館に入学
1865			日新館一等に昇級
1867	大政奉還		
1868	戊辰戦争	篭城戦参加・塩川村に移住	篭城戦参加　奥平謙輔の書生となる
1871	廃藩置県	留学生として渡米（改名）	アメリカに留学
1872	学制交付	ベーコン牧師宅に	イェール大学に入学
1875			学位を得て帰国
1876			東京開成学校教授補
1877	西南戦争		東京大学理学部教授補
1878		バッサーカレッジに入学	
1879			東京大学理学部教授となる
1881			鉚と結婚
1882		卒業(6・14)　帰国(11・21)	
1883		陸軍卿大山巌と結婚	
1888			理学博士の学位を受ける
1890	第一帝国議会	明治天皇、大山邸行幸	
1893		長女信子、子爵三島弥太郎と結婚	東京帝国大学理科大学学長
1894	日清戦争		
1895		長女信子、正式離婚	X線実験に成功する
1896		長女信子死亡	
1900		女子英学塾顧問	
1904	日露戦争		貴族院勅撰議員
1905		日赤篤志看護婦人会理事就任	
1906			
1907			私立明治専門学校総裁
1908		長男高、軍艦火災事故のため死亡	
1911			九州帝国大学初代総長　千里眼問題
1914	第一次世界大戦		東京御所学問評議員
1915			男爵の爵位授与
1916		大山巌、死去	
1919		捨松、スペイン風邪による肺炎で死去	
1920			勲一等瑞宝章を受章
1923	関東大震災		
1924			
1926			私立武蔵高等学校長
1928			勲一等旭日大綬章授与
1931	満州事変		胃潰瘍で永眠

会津藩歴代藩主・当主

① 保科正之（まさゆき）
② 正経（まさつね）　正之の四男、松平性を賜る、土津神社造営（保科性）
③ 正容（まさかた）　正之の六男、御蔵図を整備（松平性を名乗る）
④ 容貞（かたさだ）　正容の八男
⑤ 容頌（かたのぶ）　容貞の長男、家老田中玄宰を用い、藩政改革、日新館設立
⑥ 容住（かたおき）　容頌の次男、在任わずか５か月で死去
⑦ 容衆（かたひろ）　容住の次男、北方警備、江戸湾警備
⑧ 容敬（かたたか）　美濃国高須藩主の子、容住の子として届
⑨ 容保（かたもり）　美濃国高須藩主の六男、京都守護職
⑩ 慶倶（のぶのり）　水戸徳川藩主斉昭の１９男、容保の養子、後に養子縁組解消
⑪ 容大（かたはる）　容保の長男、斗南藩主
⑫ 保男（もりお）　容保の七男、海軍少佐、貴族院子爵議員
⑬ 保定（もりさだ）　容保の孫、会津保松会設立（名誉顧問）
※ ⑪からは、藩主ではなく当主。現在は、第14代当主、松平保久（もりひさ）氏

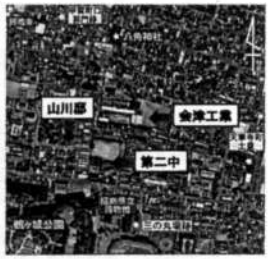
保科正之が残した「家訓１５カ条」

一、　大君の一心、大切に忠勤を存すべく、
（将軍家には絶対忠誠をつくさなければならない。）
列国の例を以て自ら拠るべからず。
（他の藩がこうしたからといって、会津藩もそれで良いということではない。）
若し二心を懐かば、則ち我が子孫に非ず。
（もし藩主が将軍家にそむくような心を持ったら私の子孫ではない。）
面々決して従うべからず。
（家臣は決して従ってはならない。）

保科正之、会津藩主に

・<1611年>２代将軍、徳川秀忠の子として誕生
・<1617年>信州高遠藩３万石の養子に（7歳）
・<1631年>高遠藩３万石の領主に（21歳）
・<1634年>兄の3代将軍家光に召され親しく面談（24歳）
・<1636年>出羽山形藩20万石に移封（26歳）
・<1643年>会津23万石に移封（33歳）
（新田2万石、預所の南山5万5千石を合わせると実質30万5千石）
・<1651年>家光の依頼により、4代将軍家綱の政治補佐役（41歳）
・<1668年>「家訓１５カ条（会津藩の約束事）」を定める（58歳）
・<1672年>江戸三田藩邸で死去。享年63歳（満61歳）

※　「末期養子の禁」を緩和、「先君への殉死の禁止」、「大名証人制度の廃止」
「玉川上水の開削」、「明暦の大火」での民衆の生活の安定に尽力など



現在の東栄町、第二中裏の
赤門の向かい側付近

１８５４年（嘉永７年）
※　日米和親条約の年
若松二ノ丁に生まれる

父：山川　尚江　　母：艶子
➡２男５女の７人兄弟（姉妹）
男：浩・健次郎
女：双葉・美和・操・常盤・咲子

歴　史　講　話

幕末・明治における
会津の人々

山川健次郎を中心に

９歳　会津藩校日新館に入学

兄は、山川　　浩（大蔵）
妹は、山川　捨松（咲子）

什の掟

一、年長者の言ふことに
　背いてはなりませぬ
一、年長者には御辞儀を
　しなければなりませぬ
一、虚言を言ふことはなりませぬ
一、卑怯な振舞をしてはなりませぬ
一、弱い者をいじめてはなりませぬ
一、戸外で物を食べてはなりませぬ
一、戸外で婦人と言葉を交へては
　なりませぬ
ならぬことはならぬものです

あいづっこ宣言

一人をいたわります
二ありがとう
　ごめんなさいを言います
三がまんをします
四卑怯なふるまいをしません
五会津を誇り年上を敬います
六夢に向かってがんばります
　やってはならぬ
　　やらねばならぬ
ならぬことは
　ならぬものです

１８６２年
会津藩主　松平容保が
京都守護職に

会津藩は、徳川家を
守ろうとする

１８６７（慶応３）年
１５代将軍徳川慶喜が
大政奉還

大政奉還とは、江戸時代末期（慶応３年）に１５代将軍の徳川慶喜が朝廷・明治天皇に政治をする権限をお返しした出来事です。
大政奉還の大政とは『政治を行う権限』、奉還とは『お返しするということ』という意味。

王政復古

１８６８年　戊辰戦争はじまる

- ●１月　鳥羽伏見の戦い
- ●５月　白河の戦い
- ●７月　二本松の戦い
- ●８月　会津の戦い

➡ ８月２３日　西軍が会津城下へ侵入

８月２３日　白虎隊が自刃
二ノ丁の友が７名も！

小松の彼岸獅子を先頭に

家老：山川　大蔵（浩）の奇策

日光口の戦いより帰還

城下は西軍が包囲

山川健次郎は白虎隊？

敬え年１５歳の健次郎は、白虎隊に属していた。１６～１７歳の少年で構成される白虎隊だが、この時期、１５歳まで含めていた。

しかし、満１４歳の少年に重い鉄砲を担がせ戦うことは体力的に無理があると判断され、１５歳の少年たちは戦争には参加しなかった。

従って、８月２３日の西軍の城下侵攻に伴い、山川家が会津若松城に入った折には、健次郎も家族とともにあった。籠城戦中、山川家の女性たちも奮闘する。山川　浩（大蔵）の妻・登勢子は落ちてきた砲弾を濡れ布団をかぶせて不発にしようとしたが間に合わず、破裂した砲弾の破片を受けて命を落とした。

斗南藩への移住
（現在の青森県むつ市）

若松・江戸から陸路を徒歩で、新潟・仙台から海路を船で、田名部に上陸。

１８６８年９月２２日　会津藩の降伏

絵巻「会津軍記」に描かれた人物。実際にはこの場にいなかった人も含まれている。

鶴ヶ城での籠城戦　1ヶ月！

「明日の夜は　何国の誰かながむらん　なれし御城に澄す月影」　新島（山本）八重

健次郎は、なぜ敵である長州人に救われた？

- 開城後、猪苗代に謹慎していた会津藩の重臣が相談した結果、山川健次郎と小川　亮に対し、越後へ脱走の薩命がでた。
- 長州藩士奥平謙輔と会津藩秋月悌次郎との密約により、会津の将来を託する人材として健次郎と小川亮の二人に白羽の矢が当ったのである。
- 危険を置して先導してくれた僧に助けられ、健次郎は新潟で奥平に会った。奥平に随行し一時、佐渡や新発田に滞在したが、明治２年５月に東京の長州藩の屋敷に入り奥平の書生になった。

健次郎を書生とした長州藩士

奥平謙輔

左より奥平謙輔、前原一誠、広沢安任、河井善順
永岡久茂

会津の人々の想い

- 城は落城・・・会津藩は敗北
- 藩士は斗南に『流刑』
- 死んでいった人々の無念さ
- 『賊軍』の汚名

↓

『会津をよみがえらせる
人を育てよう！
そのためには、教育だ！』

泣血氈

泣血氈の誓い

１８７１年　岩倉使節団

↓

１００名以上の
留学生も同行

山川健次郎

１８７１年　アメリカ留学

↓

イェール大学で物理学を学ぶ

アメリカ留学時の山川健次郎

書生時代の山川健次郎

小川　亮

前列右から山川健次郎、小川亮

１９３１（昭和６）年

※　満州事変が始まった年

６月２６日、池袋の自邸で逝去

享年７８歳

- 「はじめてカレーライスを食べた日本人」と紹介されることが多い。明治４年、国費留学生としてアメリカに向かう船中でカレーライスを食べたという記述を回想録に書き残している。
- 戊辰戦争を会津藩側の立場から見た『会津戊辰戦史』は、死後の昭和７年に出版された。この本は旧幕府軍側を「東軍」、新政府軍側を「西軍」と書いた初めての本。
- 秩父宮妃勢津子さまの婚約のために奔走したのも健次郎。

現在の九州工業大学

現在の九州大学

現在の東京大学

現在の京都大学